

## 障害者スポーツ施設職員の レクリエーション活動の価値観の分析

—身体障害者関連施設職員との比較から—

野村 一路（日本体育大学）

障害者、スポーツ施設、レクリエーション認識

### 1. はじめに

身体障害者の自立をめぐる傾向は、自立の指針としてADLの獲得からQOLの向上へとその狙いに変化している。そのQOLの向上のためには余暇生活面での課題が重要視されつつある。そこで筆者らは身体障害者関連施設職員に対してレクリエーション活動に対する認識を更生施設、生活施設、作業施設、地域利用施設の区分毎に調査し、趣味開発的なレクリエーション活動が行われている反面、余暇相談の実施率が低い傾向やセラピューティック・レクリエーション（以下TR）サービスモデル<sup>1)</sup>とは異なり、地域利用施設における訓練重視の傾向などを明らかにした。<sup>2)</sup>

本研究は、前回の地域利用施設の調査対象には含まれていなかった身体障害者福祉センター〈A型〉に属する全国12ヶ所の身体障害者スポーツ施設（以下スポーツ施設）の職員に対してレクリエーション活動に対する価値観の認識を調査し、他の身体障害者地域利用施設との間で傾向に違いがあるかどうかを検討し、スポーツ施設におけるレクリエーション援助方法を検討する事を目的とした。

### 2. 方法

身体障害者福祉法によってレクリエーションサービスの提供が法的に決められている741施設のうち、地域利用施設(196施設)に含まれる身体障害者福祉センター〈A型〉30施設の中から、スポーツセンター12施設の指導担当スタッフ131名に対して質問紙を郵送し、後日郵送による返送を依頼した。131通発送のうち、117通の回答を得た。有効回答の回収率は89.3%であった。調査期間は平成5年10月28日から平成5年11月26日まで。

本研究で使用した質問紙は、「レクリエーション認識調査シート」<sup>3)</sup>を一部修正して用いた。レクリエーション認識モデルの①解放モデル、②心理モデル、③身体モデル、④交流モデル、⑤活性モデルを使用し、レクリエーション活動から得られる価値への認識を確認した。TRサービス体系の基本である①訓練段階、②学習段階、③参加段階という3段階の認識を確認した。レクリエーションの総合的価値などに関しては、①レクリエーション活動の総合的な価値、②個人の楽しみや趣味を見つけるレクリエーション援助の必要性、③集団だけでなく、個人への援助もできるレクリエーション専門職の必要性という3項目を確認した。

本研究の分析には、「レクリエーション認識調査シート」によりすでに調査を行った地域利用施設職員234名の回答と、今回調査を行ったスポーツ施設職員117名合計351名のデータをもとに、研究課題に沿って分析を行った。

### 3. 結果

#### (1)基本属性について

男女別の割合を施設別に見ると、地域利用施設では男性110名(47.0%)女性124名(53

.0%)に対して、スポーツ施設では男性70名(60.3%)女性46名(39.7%)となり、地域利用施設では女性が多くスポーツ施設では男性が多い(P<0.05)という結果であった。

年齢構成を施設別に見ると、地域利用施設では40歳代が72名(30.8%)と最も多く、続いて30歳代60名(25.6%)、20歳代55名(23.5%)、50歳代33名(14.1%)、60歳代13名(5.6%)の順であった。一方スポーツ施設では、20歳代が69名(59.5%)と半数以上を占め、続いて30歳代27名(23.3%)、40歳代14名(12.1%)、50歳代4名(3.4%)、60歳代1名(0.9%)の順であった。

## (2)レクリエーション認識モデル(RRM)に基づくレクリエーション認識について

RRMモデルに基づく10項目(表1)について見ると、気分転換に役立つという解放モデルへの肯定的な回答が90.4%で最も多かった。5つのモデル毎に肯定的な割合の平均を見ると、交流モデルが81.9%で最も多く、次に解放モデル76.7%、活性モデル76.3%、心理モデル75.5%、身体モデル73.2%の順となった。レクリエーション活動には多くの場合身体活動が伴うが、その価値が身体的効果より交流や解放、活性などにあるという認識が高いといえる。

表1 レクリエーション活動の価値観の認識

RRM/TRS	認識項目		1	2	3	4	5	NA
開放	退屈しのぎに役立つ	N	24	49	50	124	97	7
	%		(6.8)	(14.0)	(14.2)	(35.3)	(27.6)	(2.0)
	気分転換に役立つ	N	2	8	22	102	215	2
	%		(0.6)	(2.3)	(6.3)	(29.1)	(61.3)	(0.6)
心理	情緒安定の向上に役立つ	N	6	11	72	110	150	2
	%		(1.7)	(3.1)	(20.5)	(31.3)	(42.7)	(0.6)
	集団での緊張緩和に役立つ	N	6	14	60	123	147	1
	%		(1.7)	(4.0)	(17.1)	(35.0)	(41.9)	(0.3)
身体	日常生活動作訓練に役立つ	N	3	17	65	111	155	0
	%		(0.9)	(4.8)	(18.5)	(31.6)	(44.2)	(0.0)
	適度な筋力の向上に役立つ	N	8	23	71	125	123	1
	%		(2.3)	(6.6)	(20.2)	(35.6)	(35.0)	(0.3)
交流	対人関係の向上に役立つ	N	4	9	46	129	163	0
	%		(1.1)	(2.6)	(13.1)	(36.8)	(46.4)	(0.0)
	集団への自主参加に役立つ	N	3	9	55	116	167	1
	%		(0.9)	(2.6)	(15.7)	(33.0)	(47.6)	(0.3)
活性	趣味の発見や充実に役立つ	N	3	13	72	115	145	3
	%		(0.9)	(3.7)	(20.5)	(32.8)	(41.3)	(0.9)
	ハリのある生活につながる	N	3	10	63	135	140	0
	%		(0.9)	(2.8)	(17.9)	(38.5)	(39.9)	(0.0)
訓練段階	障害の受容の促進に役立つ	N	11	26	111	109	91	3
	%		(3.1)	(7.4)	(31.6)	(31.1)	(25.9)	(0.9)
	将来の趣味の獲得に役立つ	N	2	26	72	134	116	1
	%		(0.6)	(7.4)	(20.5)	(38.2)	(33.0)	(0.3)
学習段階	自由時間の啓蒙に役立つ	N	1	18	78	136	116	2
	%		(0.3)	(5.1)	(22.2)	(38.7)	(33.0)	(0.6)
	余暇情報の収集法に役立つ	N	4	41	141	100	63	2
	%		(1.1)	(11.7)	(40.2)	(28.5)	(17.9)	(0.6)
参加段階	地域活動への参加に役立つ	N	2	21	89	132	104	3
	%		(0.6)	(6.0)	(25.4)	(37.6)	(29.6)	(0.9)
	自主的行動の獲得に役立つ	N	3	9	74	152	112	1
	%		(0.9)	(2.6)	(21.1)	(43.3)	(31.9)	(0.3)
	レク活動の総合的価値	N	1	6	52	102	190	0
	%		(0.3)	(1.7)	(14.8)	(29.1)	(54.1)	(0.0)
	個別レク援助の必要性	N	2	2	21	110	215	1
	%		(0.6)	(0.6)	(6.0)	(31.3)	(61.3)	(0.3)
	レク援助の専門職の必要性	N	1	9	47	98	195	1
	%		(0.3)	(2.6)	(13.4)	(27.9)	(55.6)	(0.3)

1:同意できない、2:あまり同意できない、3:どちらともいえない、4:少し同意できる、5:同意できる

施設別の認識に有意差が認められた項目は次の3項目であった。(表2)

①解放モデル—気分転換に役立つ(P<0.05)

地域利用施設においては93.6%が肯定的な回答であったのに対して、スポーツ施設では85.3%にとどまっていた。有意に差は認められなかったものの、同じ解放モデルである適度な退屈しのぎに役立つに対しても地域利用施設は68.3%が肯定的なのに対して、スポーツ施設は56.2%とその割合が低くなっていた。

②心理モデル—集団の中での緊張緩和に役立つ(P<0.05)

地域利用施設においては80.7%が肯定的な回答であったのに対して、スポーツ施設では70.1%と低い割合であった。

③活性モデル—趣味の発見や充実に役立つ(P<0.01)

地域利用施設においては69.9%が肯定的な回答であったのに対して、スポーツ施設では84.3%という高い割合であった。5つのモデル毎に肯定的な回答の割合を施設別に見ると、交流モデルがどちらの施設でも最も高い割合であったが、地域利用施設では解放モデルが第2位(84.0%)となり、活性モデルは第5位(74.9%)であったのに対してスポーツ施設では第2位が活性モデル(79.8%)、第5位は解放モデル(70.8%)という異なる傾向を示した。

表2 施設によるRRMの有意差判定結果

RRM	認識項目	$\chi^2$	df	p	p<
開	退屈しのぎに役立つ	9.38	4	0.0524	N.S.
放	気分転換に役立つ	12.43	4	0.0144	p<0.05
心	情緒安定の向上に役立つ	4.02	4	0.4037	N.S.
理	集団での緊張緩和に役立つ	9.89	4	0.0423	p<0.05
身	日常生活動作訓練に役立つ	0.20	4	0.9953	N.S.
体	適度な筋力の向上に役立つ	3.56	4	0.4690	N.S.
交	対人関係の向上に役立つ	3.46	4	0.4847	N.S.
流	集団への自主参加に役立つ	1.82	4	0.7691	N.S.
活	趣味の発見や充実に役立つ	13.83	4	0.0078	p<0.01
性	ハリのある生活につながる	4.77	4	0.3120	N.S.

(3)TRサービス体系に基づくレクリエーション認識について

TRサービス体系に関する6項目(表1)について見ると、肯定的回答が最も多かった項目は、参加段階の自主的行動の獲得に役立つ(75.2%)、次に学習段階の自由時間の啓蒙に役立つ(71.2%)であった。段階別平均を見ると、参加段階(71.2%)、訓練段階(64.1%)、学習段階(59.1%)の順に肯定的回答が多かった。一方学習段階の余暇情報の収集法に役立つにどちらとも言えないと回答したものが40.2%と全ての設問中で最も多い回答であった。TRサービス体系に基づく認識モデルの平均値はRRM体系に基づく平均値と比べ低い値を示しており、TRサービス体系に基づいたレクリエーション援助の機会の少なさが伺われる。

施設別の値に有意差が認められたものは、訓練段階の将来の趣味の獲得に役立つの1項目だけであった。(表3, P<0.05) 地域利用施設の65.7%が肯定的な回答に対して、スポーツ施設では82.9%が肯定的な回答を示した。段階毎の平均値を施設別に見ると、全体の

傾向とそれぞれ一致するため、スポーツ施設における将来の趣味の獲得に対する肯定の割合は特に多い結果と言える。

表3 施設によるTRSの有意差判定結果

TRS	認識項目	$\chi^2$	df	p	p<
訓練	障害の受容の促進に役立つ	2.44	4	0.6550	N.S.
段階	将来の趣味の獲得に役立つ	12.71	4	0.0128	p<0.05
学習	自由時間の啓蒙に役立つ	6.77	4	0.1484	N.S.
段階	余暇情報の収集法に役立つ	4.37	4	0.3581	N.S.
参加	地域活動への参加に役立つ	2.75	4	0.6001	N.S.
段階	自主的行動の獲得に役立つ	7.10	4	0.1305	N.S.

#### (4)総合的に見たレクリエーション活動の価値の認識について(表1)

レクリエーション活動は総合的に価値のあるサービスかどうかについての問いに対して肯定的な回答は83.2%と高い結果であった。この値は全体平均で気分転換に役立つに次ぐ高い割合で、対人関係の向上に役立つと同じ値を示した。この事は、職員のレクリエーション認識がある特定の価値より総合的に価値のあるものとしてとらえられていることを示している。個人の楽しみや趣味を見つけるレクリエーション援助は必要かと言う問いに対しては、92.6%の肯定的な回答があり、個別のレクリエーション援助の必要性が認められていることを示している。集団だけでなく個人への援助もできるレクリエーション専門職は必要であるかの問いに対して83.5%の肯定的回答があった。多くの職員がレクリエーション活動は価値のあるものとして認識をし、その援助の方法として個別の援助が必要との認識を示し、そのためには専門職が必要であると認めている。また施設による認識の違いは認められなかった。

#### 4. 考察とまとめ

本研究はスポーツ施設の職員のレクリエーション活動に対する価値観の認識と他の地域利用施設との間で傾向に違いがあるかどうかを検討し、スポーツ施設におけるレクリエーション援助方法を検討する事を目的とした。傾向の違いとしては、RRM体系においては解放モデルと活性モデルにおいて違いが確認され、TRサービス体系においては将来の趣味の獲得に役立つとの認識に違いが認められた。この事からスポーツ施設においてはより趣味開発的なサービスが重要視されているといえる。総合的な価値の認識では傾向の違いは確認されなかった。しかしあらためてTRサービス体系に基づいたレクリエーション援助の機会の少なさが伺われスポーツ施設においてもTRサービス体系の啓蒙活動が必要性を強く感じた。

##### <参考文献・資料>

- 1) Peterson, C. A. and Gunn, S. L., Therapeutic Recreation Program Design(2nd, ed.), Prentice-Hall, Englewood, NJ, p.12, Figure2-1, 1984
- 2) 茅野宏明, 野村一路, 身体障害者関連施設職員によるレクリエーション活動の価値観の分析, 武庫川女子大紀要(人文・社会科学), 41, pp.79-86, 1993
- 3) 茅野宏明, 千葉和夫, 老人医療・保健・福祉・教育領域におけるレクリエーション・ワークの理論的依拠その④, 日本社会福祉学会第40回全国大会報告要旨集及び配布資料, pp.142-143, 1992